

部活動がキャンパスライフに及ぼす影響について

1150467 古川 佳弘

高知工科大学マネジメント学部

1. 目的

学生生活において部・サークル活動が果たす役割は大きい。一部の学校ではクラブ活動は必修とされており、教科学習では難しいとされる人間育成に対して、集団活動などが効果的であると考えられている。学級以外の課外活動としての部・サークル活動には教科学習では得られない教育的な意義があるだろう。

ところで、部・サークル活動への参加が学生生活に影響を及ぼす要因にはどのようなものが考えられるかだろうか。まず、考えられるのは部・サークル活動の多くが集団での活動を主体とすることから、部員全員で同じ目的を果たそうとする行動が部員同士のコミュニケーションの活発化につながり、そこで培われたコミュニケーション能力が、日常生活にも影響を与えているという可能性がある。このコミュニケーション能力の高さは性格特性としての外向性の高さに関連しているだろう。

そこで本研究では、部・サークル活動が外向性と生活規則性などの程度影響を及ぼすのかを明らかにすることを目的とした。具体的には、部・サークル活動を行っている学生は外向性が高く、生活態度が良いと予測した。

また、先行研究では部活への参加が、学習成績や意欲、教師への態度とポジティブな関係にあることが示されている(山口,2004)が、岡田(2009)ではこうした関係は部活動に積極的な生徒のみにもみられるという結果が得られた。これらの知見から、部・サークル活動への参加それ自体だけではなく、それらの活動への意欲の高さが外向性と学生生活態度を高めることが予測される。

部活動の内容の差に関して、石田・亀山(2006)では、学業に関する能力を考慮したうえで、運動部よりも文化部のほうが学習意欲と学習成績が大きかったという結果を示している。しかし、本研究は学習面ではなく外向性や生活態度などの性格や生活態度に注目

している。部・サークル活動は各部ごとに活動内容は違うが集団的特徴は同じと考え、文化部と運動部でも外向性や生活態度に対する影響に差は無いと予測している。

本研究の具体的な仮説は以下のとおりである。

2. 仮説

仮説1 運動部と文化部を比較しても学生生活態度と外向性に対する影響に差はないだろう。

仮説2 部活動を行っている学生と無所属の学生を比較すると部活動を行っている学生のほうが学生生活態度と外向性が高いだろう。

仮説3 部活動への意欲が高いほど、外向性、学生生活態度が高いだろう。

3. 方法

調査対象 高知県下の公立大学の学生合計65人(男性32名、女性31名、無記入3名)を対象とした質問紙調査を実践した。この大学では、部活動、サークル活動は強制ではないが、スポーツ推薦や特別推薦制度がある。学生の7割は部活動またはサークルに所属している。また、部活動とサークル活動の種類も野球、サッカー、卓球などの運動系から吹奏楽、茶道などの文科系まで多岐にわたる。

以下の調査は「社会心理学応用」の講義時間に実践した。なお調査時期は2014年11月上旬である。

(1) 学生生活への態度・意欲

学生生活でのアンケートやモラル調査を参考にして作成した。“夜更かしはあまりしない” “朝はきちんと起きられる”などの11項目で構成され、各項目について「非常に当てはまる(6)」から「全く当てはまらない(1)」の6段階で評定させた。

(2) 外向性

Big Five 性格特性尺度(和田,1996)の中の外向性(内向性)項目のみを用いて作成した。“話し好き” “無口な” “陽気な” などの12項目で構成され、各項目について「非常に当てはまる(6)」から「全く当てはまらない(1)」の6段階評価で評定させた。

(3) 部活動・サークル活動への意欲

“部活動・サークル活動に毎回参加している” “部活動・サークル活動は苦にならない” などの4項目で構成され、各項目について「非常に当てはまる(6)」から「全く当てはまらない(1)」の6段階評価で評定させた。

(4) 部活動またはサークル活動への所属

部活動またはサークル活動に所属しているか否か、また所属している場合は部活動・サークル活動の名称を書くように求めた。

4. 結果

1. 尺度の構成

「学生生活への態度・意欲」について、探索的に因子分析を行ったところ、5項目(項目例: “夜更かしはあまりしない。” “授業には遅れない。”)が因子負荷量.35以上を示した。これらは生活に対する規則的な取り組みであると考えられるため、「生活態度性」と名付けた。尺度の信頼性を検討する為に、「生活態度性」の α 係数を算出したところ $\alpha=.73$ とやや高い内的整合性が確認された。

「外向性」と「部活動・サークル活動への意欲」についても因子分析(主因子解)を行った。その結果、いずれも一因子構造が確認された。また全ての項目が.44以上の因子負荷を有していた為、全ての項目を採用し「外向性」の12項目の平均得点を「外向性」得点、「部活動・サークル活動への意欲」の4項目の平均得点を「部活動・サークル活動への意欲」得点とした。尺度の信頼性係数 α は「外向性」で $\alpha=.91$ 、「部活動・サークル活動への意欲」で $\alpha=.53$

であった。

2. 運動部と文化部の集団行動の特徴と部活動またはサークル活動への外向性と学生生活に及ぼす影響

まず、運動部と文化部では部活動の内容や集団の特徴が異なってくると考え、部活動またはサークル活動生を行っている被験者を文化部と運動部に分類し、各指標の平均値を比較した。部活やサークルに所属している学生(「所属」の表記)と無所属、文化部・運動部の各指標の平均値と標準偏差をTable1に示す。

運動部と文化部・所属生・無所属生の各指標の平均値をt検定により分析したところ、無所属と所属生の「外向性」($t(62)=-2.86, p<.05$)で有意差が認められ、所属生が無所属生に比べて「外向性」が高いことが示された。その他の指標の無所属と所属の「生活態度性」($t(62)=-0.42, ns$)、文化部と運動部の「外向性」($t(40)=-1.05, ns$)、「生活態度性」($t(40)=-1.13, ns$)、「積極性」($t(38)=-0.25, ns$)においては有意な差は認められなかった。有意な差が見られた所属生と無所属生の「外向性」のt検定の結果をTable2に示す。

次に、部活動への「積極性」が高いほど「外向性」と「生活態度」が高くなるという仮説を検証するために所属生・文化部・運動部に分類し「積極性」得点と「外向性」得点・「生活態度性」得点で相関分析を行った。結果は、まず所属学生全体で「積極性」と「外向性」($r=.22, ns$)、「積極性」と「生活態度性」($r=.03, ns$)からは有意な相関が認められなかった。次に、文化部と運動部で分類してそれぞれ分析を行ったが、運動部における「積極性」と「生活態度性」($r=.17, ns$)「積極性」と「外向性」($r=.16, ns$)、文化部における「積極性」と「外向性」($r=.14, ns$)、「積極性」と「生活態度性」($r=.07, ns$)の、いずれも有意な相関が見られなかった。

	無所属	所属	文化部	運動部
「生活態度性」	3.63(1.20)	3.76(1.09)	3.54(1.18)	3.93(0.99)
「外向性」	3.26(0.74)	3.94(0.94)	3.83(0.99)	4.14(0.88)
「積極性」			4.33(0.92)	4.30(0.94)

table2		
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定		
	無所属	所属
平均	3.26	3.94
分散	0.55	0.88
観測数	20.00	44.00
プールされた分散	0.78	
仮説平均との差異	0.00	
自由度	62.00	
t	-2.86	
P(T<=t) 片側	0.00	
t 境界値 片側	1.67	
P(T<=t) 両側	0.01	
t 境界値 両側	2.00	

5.考察

本研究では、大学生の部活動・サークル活動に着目し、団体行動や目的に対する意欲が学校生活・外向性に及ぼす影響について検討した。また、文化部と運動部の違いを考慮しながら、その影響過程について検討した。

1. 部活動・サークル活動が学生生活態度に及ぼす影響について

運動部と文化部での「外向性」と「生活態度性」においてt検定をした結果から有意な差は認められなかった。この結果から、運動部と文化部が外向性と生活規則性に及ぼす影響に差がないことが示され、仮説1は支持されたといえる。文化部と運動部での活動は同様に集団活動としての行動が行われており各部ごとの目的によって練習内容などは変わってくるが、集団行動の特徴による影響に差がなかったと考えられる。

部活動またはサークル活動が「外向性」と「生活態度性」に及ぼす影響については、部活やサークルに所属している学生と無所属の学生の「外向性」と「生活態度性」の平均値でt検定を行った結果、無所属の学生と所属している学生で「外向性」の場合のみ有意な差が示された。「生活態度性」

に関しては違いが見られなかった。平均値の差から所属している学生のほうが「外向性」が高いことが示され、「外向性」に関する仮説2は支持された。一方、「生活態度」に関する仮説2は支持されなかったといえる。

「外向性」は、社交的な姿勢や積極性によるものであり、部活動での集団行動により他の競技者やチームメイトとのコミュニケーションの頻度が高まり、無所属の学生よりも外向性が高くなった可能性がある。

このことから考えると、部員の人数やチームでの活動での内容が「外向性」に大きく関わっていることを理解することが必要である。その上で、ミーティングなどによる対話での意思の疎通が、「外向性」を高めることに有効であるだろう。

部活動・サークル活動の「生活態度性」に対する影響について大きな差が見られなかった。これは、無所属の学生と部活・サークルに所属している学生とで「生活態度性」の平均値に差が見られなかったことと、部活動の「積極性」と「生活態度性」に相関がなかったことに示されている。無所属の学生よりも部活の学生のほうが生活態度性が低くなる可能性のひとつとして、部活動を行っている学生は練習時間によって無所属の学生よりも帰宅時間が遅くなり、生活態度性得点が低くな

ることも考えられた。しかし、部活やサークルの学生と無所属の学生とで講義などのカリキュラムは変わることがないため、学習の意欲も変わらないのかもしれない。

2.部活動またはサークル活動への意欲が「外向性」と「生活態度性」に与える影響

部活動・サークル活動への意欲が「外向性」「生活態度性」の影響については、運動部と文化部とも有意な相関が示されなかった。この結果から、仮説3は支持されなかったといえる。

本研究の結果では、文化部と運動部を比較したときにどの数値も大きな変化は見られなかった。今回の調査では、個人の学習能力や技術の高さへの影響力ではなく、一般的な人間関係を構築する力や外向性しか検討していない。このことは、文化部と運動部で練習内容や課外活動の目的は違ったとしても、集団活動の特徴である集団行動やミーティングなどはどちらも同様に行われており、従って文化部と運動部がコミュニケーション能力の向上に同様の効果を与えている可能性を示唆している。

先行研究では部活への参加が、外向性や生活態度だけではなく学習成績や意欲(Darling et al.,2005 ; Eccles&Barder,1999;山口他,2004)にポジティブな影響を与えることが示されている。勉学と部活動の両立ができない場合に限り部活動をしなないのは仕方がないことであるが、部活動への参加が学生生活や人間性に充実を与え、学業へも意欲的な取り組みにもつながる可能性は大きくあると考えられる。本研究ではこの仮説は支持されなかったが、部活動への意欲の高さが当人の学生生活などに大きく影響することを示す研究が今後必要だと考えている。

引用文献

Darling et al.,2005;Eccles&Barder,1999;山口他,2004.

石田・亀山 2006. 中学校の部活動が学習意欲に及ぼす影響—部活動集団の特徴と部活動への意欲に着目して— 愛知教育大学教育実践総合センター, 9, 219~225.

岡田 有司 2009. 部活動への参加が中学生の学校への心理社会的適応に与える影響—部活動のタイプ・積極性に注目して— 教育心理学研究,2009,57,419-431

山口正二・岡本貴行・中山 洋 2004. 高等学校における部活動への参加と学校適応度との関連性に関する研究 カウンセリング研究 37, 232-240.

和田さゆり 1996 Big Five 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成心理学研究 67, 61-67.